

東北の

を考える

タイムテーブル

【会場：6階 601 大会議室】

- 10:00-10:15 趣旨説明
江成 広斗 山形大学
- 10:15-12:15 仙台セッション 東北地方に分布回復するニホンジカ
山内 貴義 岩手県環境保健研究センター
佐々木 智恵 宮城県林業技術総合センター
奥田 圭 福島大学環境放射能研究所
古澤 優佳 山形県森林研究研修センター
蛸原 紘子 小国町猟友会
倉本 幸輝 山形県環境エネルギー部

【会場：5階 502 展示室、6階 601 大会議室】

- 12:30-14:30 ポスターセッション（発表一覧は次頁）
コアタイム 12:45～13:30(ポスター番号が偶数の方)
13:30～14:15(ポスター番号が奇数の方)

【会場：6階 601 大会議室】

- 14:45-17:00 基調講演
生態系と社会のダイナミズムを見据えたこれからの人と自然の関係性のあり方
富田 涼都 静岡大学

ツキノワグマの保護管理

中川 恒祐 (株)野生動物保護管理事務所

- 17:00-17:10 総括
林田 光祐 山形大学

【会場：マルシェ居酒屋夜市（地図は後頁）】

- 18:00-20:30 懇親会（事前申込者のみ）

ポスターセッション

(注) 頭の数字がポスター番号です。指定された箇所に、備付けの虫ピンで掲示してください。
虫ピンは数ミリ程度差し込む程度とし、奥まで打ち付けないでください。

1. 高山地域におけるくくりわなを用いたニホンジカの捕獲（丸山哲也）
2. オオカミ復活と森の未来（南部成美）
3. スマートフォンを活用したロードキル対策（可児里砂）
4. 山形県最上町における野生動物の生息状況（千葉翔・古澤優佳・齊藤正一・中川優梨花・高内将文）
5. 山形県村山地域におけるイノシシの目撃及びセンサーカメラ撮影による分布状況と豪雪地帯で捕獲されたイノシシの冬季胃内容物について（小城伸晃・中村夢奈・大山研二）
6. 希少猛禽類チュウヒの遺伝的多様性と構造解析（長井和哉・高橋佑亮・山崎翔気・東厚樹）
7. 15年目の戦場ヶ原シカ侵入防止柵とシカ生息数変化（竹田努・岩崎真純・田島美和）
8. ツキノワグマの骨強度とC細胞の季節変化（山城大二郎・土屋剛・鶴野レイナ）
9. 住肉孢子虫のシカの体内分布と地域分布について（小野寺俊貴・土屋剛）
10. ニホンジカの大きさと成長ホルモンのSNP（一塩基多型）の関係（土屋剛・長根翔子）
11. 牡鹿半島内外のシカの齢構成と歯の摩滅度（森田駿・加藤芳巳・土屋剛）
12. 電気さくを活用した早期防御の有効性（菊池恭則・滝沢勲）
13. 縄文柴犬の保存活動と害獣に対する活用例（土井鐵徳）
14. 原発事故避難区域で増加したイノシシ個体群の遺伝構造解析（藤間理央・奥田圭・兼子伸吾）
15. カラスによる電力設備への営巣：地域および環境間の比較（白井正樹）
16. 福島県富岡町における哺乳類の生息状況について -2014年から2016年にかけてのセンサーカメラ調査結果報告-（鬼久保浩正・板谷浩男）
17. 盛岡市猪去地区におけるツキノワグマの食性（久門美月）
18. タブレットを活用した集落点検活動への取組み（三浦隆一）
19. イノシシ死体に来訪した動物種とその行動（奥田加奈・奥田圭・江成広斗）
20. 多雪地と寡雪地における中・大型哺乳類8種の冬季の生息地選択の比較（田中元久・江成広斗）
21. 仙台市におけるツキノワグマの行動事例（三木清雅）
22. 山形県鶴岡市朝日地域におけるニホンザルの夏季の生息地利用の変化～2015年・2016年の比較～（野内光平・江成広斗）
23. 東北地方におけるニホンジカのGPS首輪装着状況とデータ活用に向けた今後の展望（関健太郎）
24. 積雪地域における侵入初期段階のイノシシの生息地選択性の評価（金成哲治・江成広斗）
25. 行政主導の鳥獣対策が地域コミュニティにもたらす影響（江成はるか）

仙台セッション

東北地方に分布回復するニホンジカシカセッション

合同会社 東北野生動物保護管理センター 宇野壮春

国は平成26年に鳥獣保護法を鳥獣保護管理法へと改正し、鳥獣の管理を明確に位置づけた。同時に「指定管理鳥獣捕獲等事業」を創設し、集中的かつ広域的に管理を図る必要があるニホンジカとイノシシを、国が「指定管理鳥獣」と指定して、都道府県が主体となって捕獲を行うことができることとした。

これらの鳥獣は全国的にみると農林水産業や生活環境へ恒常的な被害を及ぼしていることは間違いない。しかし、東北地方の多くの地域ではニホンジカとイノシシを過去に絶滅させた歴史があるため、その事情が少し異なる。すなわち、東北地方は分布回復の過程で低密度と高密度の地域があること、それらは温度差があること、高密度地域での対策やモニタリング手法が低密度地域では当てはまらないこと、現代の住民はこれらの鳥獣に馴染みがなく問題意識が低いこと、多くの狩猟者は捕獲方法を確立できていないこと等、多岐にわたる。一方、低密度地域の狩猟者は大物猟を楽しみにしている傾向もみられる。

本セッションではこのような様々な問題に対して、国の定める所の主体となる県に焦点を当て、それぞれの現状と目標設定、課題について共有することを目的としている。そしてこれらの現実から参加者間で問題意識を共有し、研究者レベル、県レベル、市町村レベル、地域レベルといった形で情報発信することを期待したい。



基調講演 1

生態系と社会のダイナミズムを見据えた、これからの人と自然の関係性のあり方

静岡大学農学部 富田涼都

「人口減少社会」は、いまや日本が直面する大きな社会問題として考えられている。確かに、近代以降の日本社会では、制度や経済、コミュニティ、価値、思想までもが「人口が減少する」というトレンドの中では育まれてこなかった。特に戦後は、人口の自然増（生まれる子どもが亡くなる人よりも多い）を前提にして社会がデザインされ、自然との関係もかたちづくられてきた。しかし、今はその前提条件が崩れている。

前提条件を含めて根本的に生態系と社会の状況がダイナミックに変わりつつあるのならば、今を生きる私たち自身もそれを見越して人と自然の関係性のあり方を見直していかなければ、最終的には適応しきれないだろう。もちろん、野生動物関係に限っても鳥獣害の被害防除や個体群管理など今でもすべきことは数多くあるが、それらは決して根本的な解決を導く万能薬ではないはずである。

今回は、この問題の解決の糸口について佐賀県唐津市相知町の農村で行われた自然再生事業とそれに対する住民の対応の事例を軸として考えを深めていきたい。住民たちは小学校の閉校などの「事件」を背景にしながら、自然再生事業を自分たちが「なるべく多くのことを後世に残す」ためのきっかけの一つとして位置づけはじめた。新たに造成した棚田でのコメ作りや「ため池」の干し上げ（堤返し）体験などは決して過去の「もの」の復元ではない。むしろ、「もの」として見れば、現代的にカスタマイズされた活動に過ぎない。それでも、住民たちには過去の「もの」を復元するよりも、伝統的に育まれた自然の恵みを楽しむための社会的な「媒介」（身体的なスキルや道具的な技術、文化）を子どもたち伝え、その土地の自然との関係をつくり、深める「こと」が重視されている。

それは、この先の未来どんな社会になろうとも、その土地の自然との関係性のなかで人は生きていかざるを得ないだろう、というある種の世界の理解（倫理）があるように思われる。だからこそ、自然から恵みを得る可能性を少しでも多く残すために「なるべく多くのことを後世に残す」ことに価値が置かれたのではないだろうか。実際、これまでの歴史の中でも農山村は、先祖から引き継いだ「多くのこと」によって、「もの」としての姿かたちを変えつつも、持続することが可能になってきたのではないだろうか。裏を返せば、自然の恵みを楽しむ、災いを避けるための「媒介」を失い、自然との関係に価値を見出す「こと」ができなくなった場合、それを代替する外部の社会システムや技術がない限り、農山村を維持することはできないだろう。

これまで想定しなかった根本的な変化を予測することは難しい。極端に言えば、近代的な国家・行政機能や技術体系が持続的であるのかどうか不確実性が危惧されるからこそ、どれだけ「多くことを残す」かが一つのリスクヘッジになり得る。また、それに何らかの価値を見出し得る社会や経済実践が必要とされ、また、実際に各地で少しずつ試みられている。今、私たちはそうした転換点を目撃しているのではないだろうか。

基調講演 2

ツキノワグマの保護管理

(株) 野生動物保護管理事務所 中川恒祐

ツキノワグマは、北海道および絶滅したとされている九州を除けば、広く日本に生息している。しかし、他の大型哺乳類同様にこの 40 年間でその分布は大きく変化している。1970 年代後半は、特に西日本において個体群の孤立化が進んでおり、東北地方においても一定の連続性は保たれてはいたが、地域によっては連続性が乏しい状況であった。これに対して、2010 年代になると、西日本ではいくつかの個体群が連続性を回復し、全国的にも分布域が大きく拡大し、多くの地域で市街地周辺に生息域が隣接するような状況になっている。また、いくつかの地域は個体数の明らかな増加も近年報告されている。

このような状況の中、人とツキノワグマとの軋轢が増加している。今年度は秋田県鹿角市で 4 件の死亡事故が発生するなど、ツキノワグマに関するニュースが多く報道されているように、全国的に人身被害、農林業被害、人々の精神的被害等の様々な被害が多発し、人とツキノワグマの共生において大きな問題となっている。

ツキノワグマの保護管理において重要なことは、様々な被害を軽減、防止した上で、個体群の安定的な維持を図ることである。本講演では、現在のツキノワグマを取り巻く情報を整理すると共に、保護管理において実施されている施策や取り組みについて演者の活動する西日本の例を中心に報告する。また、演者の所属する会社ではシカやイノシシのわなにツキノワグマが捕獲される錯誤捕獲個体の放獣を約 20 年実施しており、西日本におけるツキノワグマの保護管理施策の一部を担ってきた。一方、近年はシカやイノシシへの捕獲圧の強化およびツキノワグマの分布拡大・個体数増加により、単純に錯誤捕獲が増加するだけでなく、不適切なわなの管理や捕獲したシカやイノシシをツキノワグマが捕食するなど、錯誤捕獲に関わる様々な問題が発生してきている。このような錯誤捕獲の実際や課題についても報告する。



人口減少社会適合型野生動物管理システム創生拠点のご紹介

制度改正や各種支援事業の拡大に伴って、野生動物の保護管理の体制はここ 20 年間で大幅に充実してきたことは間違いありません。一方で、鳥獣問題が解決に向かっているという確かな実感を得られている地域はいまだ限定的ではないでしょうか。その理由は社会の急速な変化、すなわち「人口減少社会」にあると考えられます。鳥獣問題の多寡に関わらず、少子高齢化に伴って、日常的な生活や生業における閉塞感に苛まれている農村集落は増加しており、鳥獣被害という個別の社会・環境問題における「解決の方向性（ゴール）」について、具体的に創造し、社会的な合意を形成することが難しくなりつつあります。また、そうした「解決（ゴール）」をたとえ見いだせたとしても、担い手不足がさらに進む人口減少社会では、それに対応可能な野生動物管理の知見や技術はまだ限定的です。そこで、人口減少時代という現実と未来を直視し、新たな時代に適合する新しい野生動物管理のあり方が今まさに求められています。

2014 年度に山形大学先進的研究拠点としてスタートした人口減少社会適合型野生動物管理システム創生拠点では、こうした喫緊の課題に取り組むために、人口減少率が全国で最も高い水準にあるここ東北において、これからはじまる本格的な人口減少時代においても適応可能な新たな野生動物管理システムのプロトモデルの構築に挑戦しています！

<現在の取り組み>

- ① 野生動物管理に必要とされる(1) 野生動物の捕獲・目撃情報、(2) 被害情報、(3) 対策実施状況と効果測定、などについて、効率的な集積体制の構築と活用を進めています
- ② 東北地方多雪帯において、近年新たに流入が確認されているニホンジカやイノシシについての低コストの個体群モニタリング技術を開発しています
- ③ ニホンジカやイノシシ・イノブタなどの生息状況を把握するための遺伝情報のモニタリングのために遺伝子サンプル集積体制の構築を進めています
- ④ 東北における野生動物管理研究拠点の形成、研究機関・行政・民間組織との連携強化のために東北野生動物管理研究交流会の開催・支援をしています

<実施体制>

山形大学内：玉手英利（理学部教授）、林田光祐（農学部教授）、江成広斗（農学部准教授、拠点代表者）、半澤直人（理学部教授）、林雅秀（農学部准教授）
学外協力者：齊藤正一（山形県森林研究研修センター・研究主幹）、宇野壮春（[同]東北野生動物保護管理センター・代表）、奥田圭（福島大学環境放射能研究所・特任助教）、奥田加奈・江成はるか（任意団体：野生動物調査団）

懇親会

18:00 - 20:30

参加者の皆様と交流しましょう！

店名 マルシェ居酒屋夜市（会場より徒歩10分）

住所 仙台市青葉区一番町3-8-1ラ・ベル・ヴィ4F

定員 先着100名

会費 （一般）3,500円 （学生）3,000円

（参加をご希望の方に後程提示致します）

※事前の申込みが必要です。当日参加は受け付けておりませんので、ご注意ください。

17:40 から受付が設置されています

